

平和は自らつくり上げるもの

上 廣 哲 治

広島・長崎への原爆投下、そして日本の敗戦から七十四年目の八月を迎えました。毎年この季節になると、私たちは数珠を一つ一つ爪繰るように、「今年はあるから何年目にあたるのか」を数えあげてきました。唯一の戦争被爆国であるにもかかわらず、巷ではそろそろ「戦後何年」という言い方をやめてはどうかという声も聞こえてきます。しかし、こうして数えあげてをやめてしまつたら、戦争の記憶はたちまち風化してしまうに違いありません。

「新書大賞2019」で大賞を受賞した吉田裕さんの『日本軍兵士 アジア・太平洋戦争の現実』は、当時、戦場で日本軍兵士がどのような状況に置かれていたのかを、さまざまな資料をもとに明らかにしています。同書によれば、昭和十六（一九四一）年十二月から二十年八月までつづいたこの戦争の日本人戦没者は、民間人をふくめておよそ三百十万人。その約九割が、昭和十九年から敗戦までの短期間に集中しているといえます。しかも、戦闘による死者よりも戦病死者のほうがはるかに多かつたこと、なかでも餓死者が多かつたこと、船の沈没による「海没死」も三十五万を超えること、兵士の自殺率が世

界一といえるほど高かつたことなど、驚くべき実態が次々に明かされていきます。

吉田さんは、これまでの戦史では軽んじられていた「兵士の目線」を重視して戦場の現実を描こうとしています。なぜそのような観点が必要なのかといえば、戦争体験者が人口の一割を切り、当時の記憶が次第に継承されなくなつたからだといえます。戦争に対するイメージが映画やゲームのようにバーチャル（仮想的）なものになるなかで、「痛い」「重たい」「苦しい」といった兵士たちの身体感覚に思いを致すことによつて、戦争の悲惨さを実感し直視してほしかつたというのです。

昨年、九十八歳で亡くなつた俳人の金子兜太さんも、戦争体験の風化に対して同様の危機感を抱いていました。戦場においてをかいたこともなく、「死の現場」をわかつていない人たちが、机上の空論で戦争を語ることに警鐘を鳴らしつづけたのです。金子さんの著書『あの夏、兵士だった私』には、「人間が人間でなくなる」戦場のありさまが克明に描かれています。

昭和十九年三月、金子さんはミクロネシアのトラック島（ニューク諸島）に派遣されました。しかし、前月のアメリカ軍の空襲により、島は軍事基地としての機能を失っていました。七月にサイパン島が陥落すると、補給路はとどえて食糧不足が深刻になり、餓死が日常の光景となつていきました。

部隊の兵士同士の殺し合いも起きるなかで、戦争に対する金子さんの考え方を大きく変える出来事がありました。武器も弾薬も補充されない状況を打開するため、手榴弾を試作して実験することになつたのです。それをやらされたのは兵隊ではなく、兵隊の下で働く民間の工員たちでした。実験は失敗し工員は即死、指導役だつた落下傘部隊の少尉も心臓に破片を受けて死亡しました。

そのときです。普段は荒くれ者の工員たちが十人ほど、倒れた仲間をかつぎあげて二キロ離れた病院

に向かつて走り出しました。腕は吹き飛び、背中もえぐられ、もう亡くなっているのはわかっています。必死で走って行く。金子さんは、彼らの「ワッショイ、ワッショイ」というかけ声がずっと耳に残っているといいます。ところが、落下傘部隊に少尉の死を伝えると、こちらでは隊長以下、皆が笑っている。彼らは「死」に慣れきってしまった、実験で仲間が死んでしまったことをなんとも思っていないのです。金子さんは次のように記しています。

「そのときに私は感じました。『工員たちの懸命な救命行動もあれば、一方で死をなんとも思わない人たちがいる』と。／置かれた状況が人間を冷酷に変えてしまうのです。戦争とは人間のよさを惜しげもなくつぶし、感覚を麻痺させるのだと痛感しました」(前掲書)

以来、金子さんは徹底して戦争を憎むようになったといいます。

ところが、そのような戦争体験者の思いとは裏腹に、戦後半世紀を過ぎる頃から、戦場の現実からかけはなれた「戦争観」が目立つようになってきました。なかには、当時の日本軍を礼賛し、金子さんのいう「人間のよさ」が、戦場においてこそ輝いていたとする論調まで現れます。悲惨な戦争を繰り返してはならないという思いさえも、「平和ボケ」として片付けられることがあるのです。私たちはこうした風潮に流されないためにも、戦場に生きた兵士や、死と隣り合わせの生活を強いられた民間人の「身体感覚」に、何度でも思いを致す必要があります。ときには戦争体験者の話に耳を傾け、あるいは書物や映像を通して戦争の悲惨さを再確認し、それらを次世代へと伝えていくことが大切なのです。

毎年八月の「平和祈念朝起会」において、私たちは国の内外を問わず、戦争のすべての犠牲者に思いを寄せ、二度と戦争を繰り返さないことを誓うとともに、今ある平和の尊さを胸に刻んでいます。ここ

でいう「平和」が、戦争のない状態を指しているのは当然です。しかし、わが会では平和をより広くとらえ、「人間同士の愛和」や「我も人も仕合わせ」が実現している状態であると考えています。

戦争のない平時においても、世界にはさまざまな暴力が存在します。身体に危害を加える暴力だけではなく、差別やいじめなどの精神的な暴力もあるでしょう。インターネットなどで繰り返げられる、他民族への「ヘイト・スピーチ」もわかりです。私たちは、そのような日常の暴力を「愛和」によって正していくこそが、平和に向かう実践の要であると考えているのです。

初代会長は、立会の契機と平和のための実践について次のように記しています。

「私は、あの終戦直後の広島島の焦土から立ち上がって本会を創立いたしました。いつに日本国民こそ、全世界に向かつて平和を主唱できる国民であると、自覚したからにはかなりません。／まず国内の平和から、否、われわれの周囲の平和から、それには家庭の平和から、自らの実践と普及の情熱によって平和を実現していくために、本会を創立したのであります」(『希望と人生』)

平和は、どこか遠くからやってくるものではありません。私たち自身が身近なところからつくり上げていくべきものです。そのためにこそ、わが会は立ち上がり、倫理普及に力を注いできたのです。

では、政治団体でも宗教団体でもないわが会が、平和のためにやることはなんでしょう。それは、「愛和」に努め、「我も人も仕合わせ」を目指す実践に励むことです。他者の仕合わせこそが自らの仕合わせにつながることを信じ、地道に実践をつづけていくことこそが、戦争や暴力のない平和を築くための最初の一步になるはずす。